

# 牛舎の日記

伊藤左千夫

青空文庫



一月十日 午前運動の為め亀井戸までゆき。やや十二時すぐる頃  
 帰て来ると。妻はあわてて予を迎え。今少し前に巡査がきまして  
 牛舎を見廻りました。虎毛が少し涎をたらしていました故驚口  
 瘡かも知れぬと申して。男共に鼻をとらして口中をよおく見ま  
 した。どうも判然はわからぬけれど念のため獣医を呼んで一応見  
 せるがよかろうと申して。今帰ったばかりです どうしましょう  
 と云う。予はすぐ其の足で牛舎へはいつて虎毛を見た。異状は少  
 しもない。老牛で歯が稍鈍くなっているから。はみかえしをやる  
 度自然涎を出すのである。此牛はきょうにかぎらずいつでもはみ  
 かえしをやる度に涎を出すのはきまつて居るのだ。それと角へか

けて結びつけたなわの節が。ちようど右の眼にさわるようになっていたので涙を流していた。巡查先生之<sup>これ</sup>を見て怪<sup>あやし</sup>んだのである。

獣医を呼ぶまでもなしと予が云<sup>い</sup>うたので。家内安心した

十一日 午後二時頃深谷きたる。当区内の鷺<sup>がこうそう</sup>口瘡<sup>この</sup>は此六日を以<sup>もつ</sup>て悉<sup>しつかい</sup>皆主治したとの話をした

十二日 午前警視庁の巡回獣医来る 健康診断のためである。例の如<sup>ごと</sup>く消毒衣に服を着かえて。くつを下駄にはきかえて牛舎を見<sup>み</sup>廻<sup>まわ</sup>った。予は獣医に府下鷺<sup>がこうそう</sup>口瘡の模様を問うた。本月二日以来新患<sup>とどけい</sup>の届<sup>とどけい</sup>出でがないから。もう心配なことはなかろうとの獣医の答であつた

十三日 午前二時朝乳を搾るべき時間であるから。妻は男共をお

こしに往った。牛舎で常と変った叫はたごえがする。どれか子をうみやがったなと思うていると。果はたして妻は糟毛かすげがお産をしました。親の乳も余りありません。犢こうしも小さい。月が少し早いようですと報告した。予も起きて往て見ると母牛のうしろ一いつけんばかり間許はなれて。ばり板の上に犢こうしはすわっていて耳をふっていた。背のあたりに白斑二つ三つある赤毛のめす子である。母牛はしきりにふりかえつて犢こうしの方を見ては鳴ないている。八ヶ月位であろう。どうか育ちそうでもあるから。急に男共に手当をさして。まず例に依よつて暖かい味噌湯みそを母牛に飲ませ。寝わらを充分に敷しかせ犢こうしを母牛の前へ持来らしめた。とりあえず母牛の乳を搾りとつて。フラソコ瓶で犢こうしに乳を飲せようとしたけれど。どうしても犢こうしは乳を飲まない。よく

よく見ると余程衰弱して居る。月たらずであるのに生れて二三時間手当なしであつた故。<sup>ゆえ</sup>寒気のためによわつたのであらうと思われた。それから一時間半ばかりたつて遂に絶命した。予は猶母牛<sup>なお</sup>の注意を男共に示して置<sup>おい</sup>て寝てしまつた

夜明けて後男共は今<sup>こんぎよう</sup> 暁<sup>しとく</sup>の死牘を食料にせんことを請求してきた。全く或<sup>あ</sup>る故障より起つた早産で母牛も壮健であるのだから食うても少しも差<sup>さしつかえ</sup>支<sup>かえ</sup>はない。空しく埋めてしまうのは惜しいと云う理由であつた。女達はしきりに氣もちわるがつてよせよせと云う。<sup>い</sup>予は勿<sup>もちろん</sup>論有毒なものではあるまいから喰<sup>く</sup>いたいならそちらへ持て往て喰えと命じた。やがて男共は料理して盛<sup>さかん</sup>にやつたらしかつた。なかなかうまいです少々如何<sup>いかが</sup>ですかと云<sup>い</sup>つて。一椀<sup>わん</sup>を

予の所へ持て来たけれども。予は遂に一口を試むるの勇氣もなかつた

十四日 暖かであるから出産牛のあと消毒を行わせた。きようは  
 午後からがこうそう驚口瘡疫の事に就て。組合本部の役員会がある筈なれ  
 ど差支える事があつて往をやめた

十五日 朝根室分娩ぶんべん 牡犢おすこうしである。例に依て母牛に視せずし  
 て犢を遠く移した。母牛は壮健である。杉山発情午後交尾さした。

アンヤ陰部より出血 十三日頃発情したのであるを見損じたので  
 ある。次回のさかりの時をあやまるなど男共及び妻に注意した  
 十六日 前夜より寺島の犢がしきりに鳴く。午後の乳搾る頃にな  
 りてますます鳴く。どうしたのじゃ飼の足らぬのじゃないかと云

えば。飼は充分やってあるのです。又よく喰うのです。なんでもあいつは。十五日朝はなれて母牛の乳を一廻残らず飲みましてそれから鳴なくのです。ですからあれは母牛の乳をまだ飲のみたがって鳴なくのでしょうと男等は云いった。日くれになつてもまだ鳴いている。気になるから往いつて見たが。どうでもない。矢張やはり男等が云いう通りにちがいないようであつた

明治34年2月『ほとゝぎす』

署名 本所 さちを





# 青空文庫情報

底本：「左千夫全集 第二卷」岩波書店

1976（昭和51）年11月25日発行

底本の親本：「ほとゝぎす 第四卷第五號」ほとゝぎす発行所

1901（明治34）年2月28日発行

初出：「ほとゝぎす 第四卷第五號」ほとゝぎす発行所

1901（明治34）年2月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉には、振り仮名を付しま

した。底本は振り仮名が付されていません。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-88）を、大振りにつくっています。

※「許」と「ばかり」、「為め」と「ため」、「飲ませ」と「飲せ」、「鳴ている」と「鳴いている」、「往」と「徃」、「依つて」「依て」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は「本所さちを」です。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2018年7月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 牛舎の日記

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>